

第 46 回日本カトリック映画賞 対談

日時：2022 年 5 月 21 日 13：40～14：20

場所：カトリック浅草教会

晴佐久神父 改めまして、よろしくお願いいたします。

和島監督 よろしくお願いいたします。

神父 本当に先ほども申し上げましたけれども、この作品に出会えたことで、私たち励まされましたし、どんな監督さんなんだろうということが、我々も気になっていました。全くいい映画を観ると、その画面の向こうの、カメラの向こうに監督がいるんだなと。その監督がどうしてこの作品を撮ろうと思ったのか。どんな思いで、特にこのコロナの間に大変な思いもなさったでしょうけれど、作られていたのかなと、そこが気になるので、まずは動機について、この映画をお作りなったこととお話いただければと思います。



監督 ありがとうございます。先ほども少しお話をさせていただいたんですけれども、私はこの映画に関わる前に「だってしょうがないじゃない」というドキュメンタリー映画に編集のスタッフとして関わっていた時期があります。これが約 1 年半なんですけれども、それまでに監督が撮りためた 60 時間ぐらいの映像素材を監督と一緒に 2 時間にまとめていくという作業でした。

内容というのが、監督自身が 40 歳を過ぎてから ADHD という診断を受けて、そのときに自分の父親から「親族の中にも少し違うけれども、軽度の知的障害と自閉症のある叔父さんがいるんだけど、よかったら会いに行ってみたらどうだ」というところから、始まっていて、監督はその叔父さんの家に通っていて映像を撮り始めるのです。その方、おじさんというのがまことさんという方なんですけれども、軽度の知的障害と自閉症がある方で、お母様が亡くなられてから、お母様が亡くなられた家で、1 人で暮らしています。その一人暮らしは、親戚の方と福祉サービスの方の支えによってギリギリ成り立っているという状況だったんですね。

そういった様子、まことさんの暮らしを支えるためにくる人たちとの本当にほのぼのとした映像を私は見ていたんですけれども、その中にこの映像は監督から使わないでくれというのがいくつかあるんです。それはお隣さんが映り込んでいる映像、お隣さんが

苦情を言いに来ている映像、お隣さんが映り込んでしまったりとか、声が入ってしまったとか、そういうことがあるわけです。「それは使えないから」といわれていました。その理由は、自閉症を原因とする予測のつかない言動というものによって、近隣の方がいろいろな不安を抱えていたり、憤りを持っていたりして、映画には関わりたくないと以前からいわれていたんです。関係性がよくない状況だったので、映画の中に取り入れてしまうことは困難な状況でした。私はその時はじめて、障害のある方が地域の中で孤立しているという問題を目の当たりにしました。そのときに監督がプロデューサーにお願いして、もう一度取材の申し込みをできないかということをお隣の方に間接的にお願いをしてもらいました。それは断られ、絶対にいやなことであって、いただいた手紙の中には、これまでに起きたことがいろいろしたためられていました。心残りではあったんですけども、私が独断でそこに踏み込んでいくわけには行かないので、そのまま映画は完成しました。

完成した映画は、私はとても好きな映画なんですけれども、心残りとしてあって、どうすればその問題を映像として表現できるのかということを考えていました。そのときには、かつて自分は劇映画を撮っていたので、これは脚本を書いて、虚構という形であれば、この現実を描けるのではと思い、「梅切らぬバカ」の企画書と脚本を書き始めたというのが発端にあります。

神父 動機に反応するタイプとしては、なぜそんなに心残りだったのか。なぜ劇映画まで撮ろうというところまで行くというのは、よほど心残りだったのでしょうか。その心残りの部分を知りたいのですが……。

監督 撮影を進める中で、まことさんとスタッフの一人ひとりが少しずつ友達になっていくんですね。その友達がインフルエンザになっても、誰にも SOS を出せないまま、家の中で寝転がっている状態になっているということも撮影を進める中であるんです。友達の問題なので、そういうことを考えたときに、これって撮影が終わったからといって友達の関係が解消されるわけではないし、自分の中で引きずってしまうというのは、とても自然なことではありました。

と同時に、私自身が中学生の時に、個人的な話なんですけれども、てんかんという病気を発症しまして、てんかんということは家族にはいろいろ相談はできるのですが、家族から「これは世の中に偏見を持たれている病気だから、人には言わない方がいいよ」といわれて育ってきました。それは親心でもあると思うんですけども、親元を離れて、たとえば大学生になったり、社会人になったときに、自分の抱えている症状、それに伴う悩みというものを人に相談できない誰かに頼れない、その中で生きていかなければいけないということで、孤立感というものがずっと蓄積されていったと思うんです。そういうのと、自分が映画を作っていくというところが、まことさんという方と会って、彼もまた障害によって孤立しているというところと、少し重なる部分があるような気がしていて、そこに自分の当事者性みたいなものを見出して作り始めたということはあると思います。

神父 まことさんに自分の姿も見たとし、となると、スタッフと友達になっていくというのが、隣の家とも友達になれば、どんなにいいんだろうというようになりますよね。

監督 はい。まことさんの生活を支えているのは、遠くから来る人なんですよ。遠くから来る人なんですけれども、もっと身近なところに依存先があればまことさんも安心できるし、僕たちも安心できるというところがあって、やはり両隣との間には距離がある。これは劇映画としてだったら、その溝を埋められるのかというのと同時に、その現実を示していけるのかというか、橋を架けたときに嘘くさくならないような映画にするにはどうしたらいいかというところは脚本を書きながら悩んでいたところです。

神父 隣の家との関わりが嘘くさくなく、とおっしゃっている。嘘くさくなく、でも関わっていくというプロセスに私は感動したんですけど。変な話をすると、あの家の作りが、まさにそれを物語っているように見えたんです。古民家風の家があって、奥に新しい新築があるじゃないですか。あれ、たぶん奥を売って、でも売っても道路がないから横に路地を作らざるを得ない、日本にそういう家はいっぱいあります。その設定が私は見事だと思いました。マンションなんかだと隣誰って感じだけど、あの路地通らない遠くに行けないので、どうしたって梅の木は邪魔になるし、中の様子は気になるし、出てくればそこに会話が生まれるし、あれはセットではないですよ。

監督 あれはハウススタジオに元々あるところに、梅の木だけを後からセットしたんです。

神父 あれはよく見つけましたね。私は感心しました。

監督 なかなかああいうところが最初見つからなくて、スタッフが探してくださって、撮影が始まる1か月ぐらい前になんとかギリギリで見つかった。

神父 そんなギリギリで。

監督 そうなんです。最初は、ああいう設定を想像していなかったんですよ。最初もっとシンプルな、家が並んでいて庭に面していて、庭に梅の木があるという、ありがちな設定を僕は考えていたんですけど、あそこのハウススタジオを見たときに、この庭に梅の木があって、道にせり出していれば、関わらざるを得ないという状況が生まれるなど。



神父 関わらざるを得ないというのが、すごく大事なことだと思うんです。それはある種のリスクであったり、面倒ではあるんですけど、ざるを得ないから、結局友達になるんですよ。なんかそこに僕らが忘れていた秘密があるような気がして。それにしてもあそこに、あの梅の木はすごいですよね。あれ、普通だったら絶対切られてしまいますよ

ね。

私、あのタイトルに感心したんですけど、さあ、じゃあ、切るのか切らないのか、ずっと最後まで引っ張られて、結局切らなかったわけですけども、「梅切らぬバカ」というすでにある言葉を使って、バカでいいじゃんというメッセージも含まれているような見事なタイトルだと思ったんですけども。どんなことがおありなんですか。

監督 またドキュメンタリーの話に戻ってしまうんですが、まことさんが暮らしている家の庭には、大きな桜の木があったんですね。秋になって、冬になると、枯れ葉が隣の家に舞い散って毎年苦情が来るんですよ。そのたびに親戚が遠くから来て頭を下げるということを繰り返していて、親戚も高齢化しているので、対応しきれないので、桜の木をばっさり切るよということになって、映画の中でばっさり切られるところがあるんですね。それをまことさんが、子どもの時から住んでいた家なので、生まれたときからある桜の木がキラル瞬間の表情というのが、自分の中にとっても焼き付いていて、その編集をしているときに、これを切らなくていい可能性ってなかったのかなと、ぼんやり思い始めました。もしそこで樹木を介した交流であったりとか、そういうものがあれば切らなくてもよかったのかなというように思っていて、そういうところが、どこか心に引っかかっていたので、映画のタイトルを考えていたときに「桜切るバカ、梅切らぬバカ」ということわざがあったのを思い出して、最初そのタイトルをつけたんです。

脚本書いているうちにあの結末というのは二転三転していて、梅の木を切らざるを得ないような現実を描くべきなのかなと思って、最初に切るという前提で書いていた時期があるんです。その後に加賀まりこさんが、この映画のオファーを受けてくださって、脚本に関するいろいろなディスカッションをし始めたんですけども、その中で、加賀さんが一番こだわったのはラストで、「あの梅の木が切られると、自分の人生が否定されたような気持ちになる」と加賀さんがおっしゃられたんです。そこで自分の思いを伝えたりしたんですけども、加賀さんが「梅切らぬバカにさせてよ」と最後におっしゃったんです。そういわれると、切れないなと思いました。

神父 大女優は脚本も変えるんですね。

監督 本当に加賀さんが、役を大切にしてくださって、この映画のラストが変わっているんです。そういう意味で、出演者の方々一人ひとりにとても感謝しています。

神父 あの加賀まりこは、ちょっとうさんくさい占い師から何から、役を演じているというより、本当に珠子さんでした。加賀さんにも似ているのかもしれないね。ああいう出会いがあると、先ほども申し上げたとおり、こちらの友達が増えたという気持ちになれるし、スタッフとまことさんが友達になっていく事に、こだわり続けるというのは、私すごくよくわかります。

友達くらい大事なものないし。親子は親子です。夫婦も夫婦です。助け合って当たり前です。それすら助け合っていない世の中だけけども。だけど、親子でも夫婦でもないのに、無条件に、でも助けるよねという関係になるというその一瞬、その壁を越える瞬

間というのに、すごく惹かれるし。その友達さえあれば、世界絶対よくなるはずなのに、何で友達になれないんだろうといつも思っていて、そんな時に珠子さんが、隣の子に「友達だから」というじゃないですか。あれいい台詞ですよ。

友達だからで、全部解決する気がするんだよね、世界のことが。そういう瞬間というのが。あの台詞は本当に胸打たれました。ほかにもすごくプリミティブな台詞ありますよね。「ありがとう」とか「おたがいさまだから」とか、あなたがいてくれてお母さんは幸せだよ」とか、ああいう素朴な言葉が脚本をとっても生かしていて、脚本家としては、そういう思いで作っていらっしゃるんですか。

監督 今、おっしゃってくださったその言葉というのは、自分がその脚本を書くときの取材の対象者である自閉症の方のお母さんだったり、自分が今までてんかん患者の方とながっていく中で、教えてくれたりだった言葉が反映されています。

特に「ありがとう」というところなんですけれども、最初脚本の中にはなかったんです。珠子さんが忠さんに「ありがとう」という台詞はなかったんですね。

撮影の前日に、私が親しくさせていただいている自閉症の方のお母様に、「珠子さんと同世代で、女手ひとつで自閉症の方を育ててきた方がいるんだけれども、撮影前に一度会ってみませんか」とお声をかけていただいたんです。今、本当に 70 代後半の方なんですけれども、シナリオを読んでいただいて、そのときに一言だけ言われたのが、「このシナリオには、ありがとうがないんですね」といわれたんです。「一言だけ忠さんにありがとうという言葉があるといいな」といわれたんです。実はその前から加賀さんからも「ありがとうという言葉はどうしても言いたい」といわれていたんです。僕の中で珠子さんそういう言葉をストレートに言うかなと、ぼんやり思っていたので、加賀さんの言葉をそのまま受け入れていなかったんですけれども。

はじめて当事者の方に同じようなことをいわれたときに、ありがとうってすごく日常なんだと思って。逆に僕は普段の日常の中でありがとうという言葉が素直にいえなかっただけなのかもしれない気がつかされて、親子間のありがとうは日常の中の言葉なんだということに気がついたときに、最後の最後にありがとうの場面を入れていたという経緯があります。

神父 われわれからもありがとうございますよ。観ている方もあまりちゃんとありがとうといっていないんですよ、普段。映画の力で心が開かれて忠さんに出会って、「忠さんいてくれてありがとう」という気持ちに観ている方もなっているんです。ぜひいいたいんだけど、まさか作中の人に言うわけにもいかないし、観る代表で、加賀さん、珠子さんが「ありがとう」と言ってくると、自分たちも言いたかったと思う気持ちになる。そこが「ありがとう」というひらがな 5 文字の言葉があふれかえっているようで、それが通じる現場というのがない中で。それこそコロナの時代でも、戦争の時代でも「ありがとう」がちゃんといえているときに、映画の中できちんとこれが「ありがとう」だといってくれる。僕は映画に力があると思っています。プリミティブな言葉、警鐘的な言葉をきちんと語られていることに、まさにそこに「ありがとう」という気持ちになったということをお伝えしたいと思いました。

それにしても隣人の変化は、まさに僕らはそうありたいなと思うことでもあるし、表面だけ見たら誤解することもあるじゃないですか。エキセントリックな行動であるとか。時には本当に迷惑であるかもしれない。慣れ親しむというのは大事ですよ。だんだん慣れていく。そして親しくなっていく。そのプロセスがちゃんと描かれているところが、よかったなと思って。

隣人の一家を思い描いて書いているときは、どんなふうにかこうと思ったのですか。

監督 そうですね。ささやかな変化にこだわろうということはずっと思っていました。本当にちょっとしたことが最後にできるようになれば、最初の一步ではないですけど、そこを描くことができれば、その先はお客様の想像にゆだねてもいいのではないかなと思って作っていたんですけど、それは自分の名前を名乗るということと、「おはようございます」という最初の朝の挨拶ができるようになるところ、そこまでを自分なりにしていねいに描いていこうと思いました。

学校の取材の中で、聞いたエピソードですけど、ある障害を抱えたお子さんのいるお母様がいつもゴミ出しに行くと、いつも出会う近所のおじさんがいる。その人はこちらが「おはようございます」と声をかけても、「おはようございます」と返ってくるけれども、身体を背けられる。こちらを向いて挨拶をしてくれない。という話をしていたのを覚えていて、1日のはじめに他者との交流を拒絶されるようなことが毎日、毎日続いていくというのは、なかなかしんどい。その方は「もう慣れたわよ」と話していたけれども。何かその日常の中で少し変化が起きていたら、いいなと思っていました。

隣の里村家というのは、お母さんから始まって、聡太君、最後にお父さんが自分の名前を名乗ってようやく名乗りあえますという流れになっているんですけど。一人ひとりが順々に映画で短い尺の中で、描くことができたらいいなと思っていました。

その一方で、珠子さんがこれから忠さんの住まいについてどうしていけばいいのかという問題は、珠子さんが望むところで解決できていないということもあって、そのバランスを描くことができれば、きれいごとで終わらないんじゃないかなということも思っていて、それは自分が出会ってきた人たちの日常でもあったので、日々の中で喜びを見出しているけれども、根本的な悩みは解決されない。でもそのギリギリ、綱渡りで生きていますという人たちの日常をありのままに描くことができればいいかなと思いました。

神父 でも、きれいごととはいかないけれども、何か希望のある、特にラストの方ね。いつも思うのですが、グループホームか、あるいは血縁家族か二者択一は、なかなかどちらも難しいかなと。立派なグループホームもたくさんあるし、それは否定しないけれども、もっと広がりを持たせるためには、グループホームと普通のホームの間ぐらいのところ、それを何ホームというのかわからないけれども、その可能性があの2つの家にチラッと見えて、最初は奥の方の家は、別々のようだけれども、元々1つの家だったみたいな気配があって。特にあの旦那が酔っ払って、「ここグループホームにすればいいじゃん」みたいなことを口走ったときに、私は、それだけよね、と思った瞬間は、近代まれに見る一瞬でもあって、その後、実際にそれを描いてしまったら、ああ一あとなると

思うんだよね。あんなきれいごととはとね。だけど、可能性はあると思うし、たぶん、珠子さんはいずれ死ぬわけです。一人になったら、里村さん、出入りし始めるのではないですかね。

監督 そうであってほしいなと思うんですけども。

神父 希望が見えて、あの「ここグループホームにすればいいじゃん」の台詞はどんな思いですか。

監督 発想として、何回もドキュメンタリーの話に戻って申し訳ないですけども、まことさんの家、グループホームにしてしまえばいいとスタッフの間で話していたことで。そうすればいろいろな人が来て、まことさんも僕らも、ということがあったのです。そういうところから来ている発想です。ただ、グループホームにしたらしたで、難しいところがあるらしく、そこまで踏み込めなかったというのはあるのですが、もしそれがあっても、僕たちは反対しないよという隣人であるということが、自分にとって希望であるというか。

神父 やはり体験なさっているのですね。やっとわかってきました。何でもこういうことを思いついて、作品にできるのだらうと。なるほど、そのリアルがあるわけですね。すばらしい体験なさったのでしょうし、まことさん、グループホームしたらじゃないですか。というか、グループホームという名前が違うのかもしれないね。誤解を招くのでしょうし、法律上の問題もあるかもしれない。もっとフレンドリーな、当たり前の、友達で仲良く暮らしていますというような、暮らすとまでいわなくとも、出入りしています、みたいな。いろいろもやもやと少しはチャレンジしていたことが、あの映画を観て、でもやっちゃったらいいいんじゃないのという、そういう励ましを受けているような、とても力になりました。うれしかったです。当事者の方たちからの反応はいかがでしたか。

監督 そうですね。それが自分はとても心配だったところというか、気になっていたところでした。主人公は珠子さんなので、自閉症のお母様がどう思うかなというのが気になっていて、最初に配給会社の協力もあって、そういう方々の試写会も開催していただきました。その中で、一番印象的だったのが、「自分と同じような悩みを珠子さんは抱えていて、それは映画の中では解決されないけれども、その問題が映画の中で描かれていることで、自分の人生が肯定されているような気持ちになった」というような感想をくださった方がいて、これで、よかったのかもしれないなど。具体的な解決策を映画の中で描くよりも、その問題がそこにあるということを描くことによって救われた気持ちになる人もいるんだなということが、自分がこの映画を作ってよかったなと思うところです。

そのお母様の話だと、一緒に観ていた自閉症の子どもが、映画が始まった途端に忠さんを食い入るように、じっと観ていたということでした。ほかに観るのは、志村けんさ

んのコントと映画の忠さんだけはすごく集中して観ていてくれたというお母様もいて、忠さんを友達がここにいると観ていてくださった当事者の方もいるという話を聞いて、私も塚地さんも安心しました。全体的に温かく観てくださったという感触があります。やはりこれは現実とは違うよという意見をどこかで心配していて、もちろんそういう方もおいらっしゃると思いますが、たくさんの方に話を聞いてきてよかったなと思います。

神父 この手の、といっちはおかしいですが、そういう中では本当に格調高く、抑制して、リアリティがあって、たぶん当事者の方たちは、わかるよといってもらったような気になったと思うんです。上から目線とか、予定調和的とかではなく、大変だよ。反対する方にもそれなりの思いもあるわけだし、そんな中でなんとかやっていこうねと。当事者の方たちは無理解とか、排除とか、すごく苦しんで、あきらめている中で、寄り添ってくれたんだという気持ちになったと思う。そう思わせる格調高さがありました。うれしかったです。

誰の影響を受けたんですか。好きな監督さんおられるのですか。

監督 影響を受けているといっちしまっていていいかどうかかわからないですけども、私は京都造形大学というところで映画を学んだんですけども。そのときの担当の先生が佐藤真さんという「阿賀に生きる」という映画の監督でした。もうお亡くなりになられたけれども。ほとんどどこの大学も落ちていくところなかったときに、佐藤さんが面接の時に僕を拾ってくれました。佐藤さんが、大学の時に授業をサボっていたら、「映画作っているんだったらいいよ。その代わり作ったら、持ってきてね」と認めてもらって、批評してもらったりしました。その批評の言葉が胸に刺さったりしました。そういう経験をしていて、佐藤さんが亡くなられた後は、佐藤さんの著書であったり、佐藤さんがこれまで映画を撮られた場所に行って、佐藤さんがどのように映画を作っておられたのか、一緒に映画を作っておられた人の話を聞いて、学んできたというところがあります。

神父 ご縁を感じますね。ご存じですね。「阿賀に生きる」は日本カトリック映画賞を差し上げているんです。好きな監督さんは。

監督 佐藤さんと後は、アッバス・キアロスタミというイランの監督の作品で「風の吹くまま」という映画が好きですね。それに影響を受けているかは別にして。何度も観ているというのは、そういうところですね。

「風の吹くまま」というのは、ドキュメンタリーを撮っているクルーの映画なんですね。ある村の古くからあるちょっと変わった葬式の様子を取りに来たドキュメンタリークルーの話ですが、もうすぐ死ぬと思われていた老人がいつまで経っても死なないので、死を待っている監督の様子を撮っている映画で、その様子があるときはとてもポエティックに描かれている作品で、コメディでもあるんですが、自分が次に作ろうとしている映画ともちょっと関係があって、今思い出したというのものもあるかもしれません。

神父 キアロスタミ、好きな方も多いのではないですか。時間もそろそろなくなってきま

したが、次に計画している、ぜひ応援していることがありましたら。そんなに宣伝にはこの場ではないかもしれませんが。

監督 実話はなんですけれども、ある公害の犠牲にあった老人たちの日常を表現しようとした若者たちがかつていて、映画を撮ったことのない若者たちが3年間同じ家で暮らしながら、ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」を作るんですけれども、彼らの群像劇を劇映画で作ろうと思って、今取材を進めているところです。

「阿賀に生きる」がどのようにして生まれたのかという本が今も残っていて、『焼いた魚も踊り出す』という本ですが、自分はその本にもすごく影響を受けていて、1本の映画を作るために、一人ひとりの若いスタッフが犠牲になった人たちとどういう風に関係性を作っていたのか。10代から30代の若者が、それぞれに人生の中でどういう問題を抱えていたのかというところが、自分も同じ世代で、映画を作っている者として、かつて自分がドキュメンタリー映画に関わったものとして、気になっていたことでした。

また、公害によって分断された地域があって、その中に映画を作るためにやってきた若者が、そこで何を見たのかということ。その人たちの間に入って、どういう闇を見て、どういう関わり合い方を見つけていったのかということは、自分にとってのテーマともつながるところがあるので、それを自分なりの方法で、映画にしたいなと持っています。今、佐藤さんは亡くなられていますけれども、いろいろな方たちに会って、取材をしている状況です。一人ひとり、今もご存命なので、ゆっくりといねいに進めています。

神父 相当長い間住み込んでいたんですね。

監督 3年間です。

神父 懐かしいな。あのおじいちゃんとか、もちろんもう亡くなって……。

監督 そうです。撮影が終わって、完成した途端に次々お亡くなりになっていて、今はもういらっしやいません。だからスタッフの方がまだご存命なので。

神父 弱い立場というか、不自由な生活の中で、精一杯生きている一人ひとり、そこにカメラを向ける人に興味を持っているという構図がすごく新しい感じがします。今回もそうですね。ドキュメンタリーを撮っている。そのスタッフたち、そこで起こっている事、それを劇映画にしていける。その構造がストレートに撮るよりも、深いものを映し出せるような可能性がすごくあるような気がして「阿賀に生きる」のある意味、続編になるわけですね。それはすごく楽しみです、応援したいと思っています。

監督 頑張ります。

神父 これだけは言っておきたいということはないですか。

監督 今日、本当に皆様とお会いできて、とてもうれしく思います。実はここに来る前に、晴佐久神父様の『福音家族』を読ませていただいて、一緒ごはんをしているところってどういうところだろうかと、すごく気になっていて、あれはコロナ以前のことだったですけれども、その後のこととかもお話を伺いたいなと思っていたので、今日、その機会をいただき、先ほどチラッとお話を伺いましたけれども、お話を伺えてとてもうれしく思いました。ありがとうございました。

拍手

神父 今度ぜひ、映画に関わっている人たちの食事会をいたしますので、お声かけいたしますので、昨日、『エンディングノート』の砂田真美さんと電話でしゃべっていたんです。「旦那に洗礼授けたい」とかって。

偶然ではなく、何か大きな力が、我々を結んでくれていると思うし、映画もそこからしか出てこないと思うので、ぜひ、今回の出会いを大切にしたいと思いますので、これからもよろしく願いいたします。ありがとうございます。

拍手

司会 ありがとうございます。では、質疑応答の時間をとりたいと思います。恐れ入りますが、質問される方は、社名とお名前をおっしゃった上で、質問していただければと思います。よろしく願いいたします。

質問 「クリスチャンプレス」の坂本と申します。今日はありがとうございました。お聞きしたいのは、カトリックという名を冠した映画賞を受賞されると聞いたときに、どういう感想を受けられたのかということと、今回の映画は加賀まりこさんが久しぶりの主演ということで結構評判になりましたが、キャスティングについてどういう経緯で決められたのかということと、撮影中のエピソードがありましたら、教えていただけますか。よろしく願いいたします。

監督 ご質問ありがとうございます。カトリック映画賞というのは、はじめて聞いたのですが、カトリックだからどうかではなく、賞をいただけるということ、評価していただけるということは、すごくうれしく思いました。今年に入ってからいろいろな映画賞が映画に贈られている中で、全部「ドライブマイカー」に持って行かれていたので、正直悔しいなと思っていました。カトリック映画賞が「梅切らぬバカ」みたいな小さな映画を選んでくださったということは、本当にうれしく思いました。

キャスティングに関して何ですけれども、キャスティングというのは、監督だけが決めるのではなくて、プロデューサーと一緒に話し合っていて決めていきます。その中で加賀まりこさんという案が出てきました。今回は占い師、ちょっとインチキっぽい占い師で、歯に衣着せず、言いたいことを言う、特に恋愛相談みたいなことを受けているらしい女

性ということで、なぜか加賀まりこさんの顔が浮かんだのです。昔、映画というよりもバラエティなどでそういう部分を出されていたというのを観ていたというのがあるので、加賀さんだったらもしかしたら、ありのままにやってくれるのではないかなという思いがありました。

撮影中のエピソードについてですが、撮影自体は、コロナ禍で、台風も接近しているという状況ではあったんですけども、台風も

途中でそれてくれたりと、ずっと雨が続いていて、ずっと映画の中、雨なんですね。あれは意図したものではなくて、しょうがなく雨で、梅雨という設定とうまくリンクしていったなと思っているんですけども、これといったエピソードが出てこなくて、それくらいスタッフの方たちが、とても優秀な方たちで、出演者もそうですが、とてもスムーズに現場が進んでいきました。なので、撮影中のエピソードという、すぐに出てこなくて、逆にこの場面はどうだったのかというのはありますか。



神父 加賀さんに関するエピソード？ それとも全体に関すること？

質問 よくある話などで。後、雨の話で、設定しなくても雨が降っていたというのは、どうでしょうか。

監督 寒かったですね。忠さんがとても馬が好きな設定なので、馬のシーンがありますけれども、馬だけはいくことを聞いてくれないので、馬が逃げていくシーンを撮るのに、本当に時間がかかってしまって、塚地さんが半袖のパジャマで 10 月の雨の中、ずっと突っ立ってはいけないう状況はすごく思い出に残っていますね。

司会 ありがとうございました。